

信 每 歌 壇

小池 光 選

歓声をあげてみんなが走り出す修学旅行の初めての海
(御代田町) 柳沢 光雄
有り難き日本の文化旅行より帰って風呂に首までつかる
(岡谷市) 山岡 はな
アカシヨウビンの高く啼く声床に聞き四時半起きして夏草を刈る
(泰阜村) 松島 房子
「二人だけで『あずさ』に乗るは初めて」と四時半ばの娘は言いし
(大町市) 小西 美恵
育てたる初ジャガイモの味噌汁はなんとも旨きお代わりをする
(佐久市) 小泉 英介
八十九で「八方にらみ鳳凰図」描き上げし北斎の氣力と体力
(長野市) 島田 悦子
栗の花こぼるるこく咲く中で何をしよう一羽の鴉
(飯綱町) 坂井 寿男
海の家シーフードカレー食べたこと無いまま海がまた遠くなる
(松本市) 美甘 歎
古古古米かめばかむほ味があり古古古古古女わたくしの味
(千曲市) 関 津和子
おかえりとしゃがんで言えはかけよってランドセルより大きな笑顔
(塩尻市) 島津 文雄
佳作
牛ガエル平身低頭する如く車に轢かれ炎天下の道
(千葉県船橋市) 清水 渡
「幻のツチノコが居た」と告げる妹大きな瞳に
(上田市) 山本 進

第一首、長野県には海がない。修学旅行ではじめて海を見た子もいただろう。海を見て歓声をあげて走りだす。遠い日の思い出を昨日のここのように歌っている。第二首、海外旅行から帰国しての感

想か。欧米人のお風呂は日本と違う。やっぱりお風呂は首までつかるのがいい。日本文化に生まれてよかった。第三首、4時半に起きて夏草を刈る。その氣力、体力にうたれる。頭が下がる思い。

小島 なお 選

どくだみを切ればやさしき音がする花鉄とふ大人の道真
(松本市) 堀内 悠子
やっぱり田んぼって大切なよねとめがね屋の兄さん話したむ視力検査
(上田市) 香乃みずな
徳富会の案内メールいたなくもあの思い出は語りたくない
(長野市) 宮崎 雄
祖父の遺影曾祖父の遺影伯父の遺影 天袋より次々と出づ
(塩尻市) 藤森 円
そのものを使ふは年間ふつかにて「電子計算機」なる授業ありけり
(長野市) 原田 浩生
かりそめの自由を手にし走って犬はリードの長さの内に
(茅野市) 三好 碧
遠き日の水路の柳に夕顔は虎でつかちに実ついたり
(上田市) 小林さよ子
歯医者さんの大きな窓は好きな窓広がる空に心伸びやか
(上田市) 上平 光子
この犬はここに居るぞと跳ねるからAM五時に目が合つてしまふ
(千曲市) 石黒 信幸
初めてのカリフォルニア米を仏壇へ父母妻ようだのお味は
(上田市) 宮崎 拓男
佳作
新聞に包みし鯉は里土産と坂道登る自転車
(長野市) 矢島あさ子
片翅を曳きて這いつつ飛ばんとする蝶を見つめる堪えて見つめる
(木祖村) 佐々木千代子

第一首、茎がつぶれないよう刃の薄い花ばさみ。やさしくも凛しい切れ味は、大人のたしなみとも言える。第二首、世間話はいつしか真面目な話に。思いがけない場所で意外な相手と意気投合した。第三首、多くの人に慕われていた故人。だからこそ語りたくない記憶はいつまでも生々しく残る。第四首、男性の遺影ばかりが次々と。そこには日本の家父長制のほの暗い闇がしまわれている。

米川 千嘉子 選

死の床にこの熊除けの鈴振れば誰が来るか他愛なきこと思う
(木祖村) 佐々木千代子
半ドンが死語でなかった土曜日の前と出会った十八の午後
(小川村) 伊藤 宗善
空腹に焦る女性が注文すBLTをBTSと
(伊那市) 赤羽 正彦
この写真は多分父の祖父 吾が父は言ひ残せずに死んでしまへり
(塩尻市) 藤森 円
夕方の職員室に香りたるメロン食へやと泣きべその子へ
(小諸市) 加藤 陽介
全停電しても水張り田の国は月星たちが所在教える
(千曲市) 大谷 善邦
あんずの箱開ければそこに神渡り詠む歌の載る新聞がある
(盛岡市) 木村 英樹
朝ごとに「今日は何の日」と娘に問う米寿となるわれ子どもの如し
(松本市) 古藤 良枝
をさな児はなんでなんでと我に聞く「青虫さんをなんでつづすの」
(中野市) 大坂くみ子
前よりもより丁寧にしやもじ持ちひと粒残さずご飯をおひつへ
(長野市) 松本 博人
佳作
書きためた歌詠みかえす次つぎとなつたしき顔あらわれる夜
(長野市) 島田 悦子
スパーで買い物を客を見てをれば陰し顔の人の多かり
(松本市) 中村 博穂

第一首、鈴は屋内で人を呼ぶためのものでもあった。ふとした戯れのように詠まれながら味わい深い。第二首、半ドンがあったからこそこの出会い。土曜の午後独特の開放感も懐かしい。第三首、ペー

コン、レタス、トマトサンド(BLT)と韓国のアイドルグループ「BTS」の言い間違いが楽しい。初二句で表情も出た。第四首、突然の別れだった。覚悟や準備していないと聞けないことがたくさんある。